

飛耳長目

通巻175号 平成30年6月1日発行

「修身教授録」探求（第三百二十八回） 結婚生活のきびしさ

森信三

現在わかい女性の人々には、どうも結婚というものに対する考え方が、一般に不十分なように思われます。と申しますのも結婚といえ、とかく華やかな春の野に蝶の舞うように考え易いようであります。しかるに現実の結婚生活というのは、決してそのような華やかなものではないどころか、実に人間生活のうちでも最も厳粛なものといつてよいでしょう。実さい現実の結婚生活というものは、いわゆる浮わついたような考えでは、どうい乗り切ることの出来ないほどの厳しい道だからであります。あなた方は何よりもまずこのことを知らねばなりません。

では何ゆえ近ごろのわかい女性の人々は、結婚についてさような甘い考えを持ちやすいかと申しますと、そこには大体二つの原因があるかと思っております。即ちその一つは映画のせいであり、もう一つは新聞雑誌のいわゆる恋愛小説のせいでありましょう。元来小説というものは、わたくし自身も嫌いな方ではなく、また好き嫌いということを超えて、卓

た小説は人を教育する上にずいぶん大きな力を持つとも思うのであります。がそれにも拘わらず、いわゆる興味本位の恋愛小説というものが、人々とくに若い人々に対して与えている影響については、憂慮の念の禁じ難いものがあるのであります。さらに映画に至っては、この傾向はさらに一層甚だしいともいえましょう。即ちそれは具象的感覚的であるだけに、その与える影響は、一そう深刻なものがあるわけであります。実さい近ごろのわかい女の人たちの髪の結び方一つを見ましても、そこには外国映画から受ける影響は、けだし甚大なるものがあるといえましょう。

かくして、現在未婚のわかい女の人々、とくにあなた方のように、未だ学窓にあらる人たちが、結婚というものについて考える場合、その手掛りとし足場となる材料は、その多くが映画や恋愛小説から来ているのが、おそらくはその大部分を占めるといつてもよいでしょう。実際これはやむを得ないこととも思うのです。即ちそれは良いとは言えないにしても、現実の事実としては、無理からぬ点が多かろうと思つて申すわけですね。と申しますのも、そもそも結婚生活の内情というふうなもの、誰も一々それを語り歩く者はない

わけですから、勢い事実としては、恋愛小説とか映画などで見聞きしたことが材料となる他ないわけで、むしろそれは当然ともいえましよう。もともと兄弟、特に姉などが他へ嫁ぎでもしている人は、結婚が現実には如何なるものかというようなことも、多少は分るともいえましよう。しかしそれすらも、あなた方のような年配では、とかく表面の花やかな処ばかりが眼について、実際に心を悩ましている事柄などは、たやすくは分りにくいのが常というものでしょう。なるほど時には、たまさかの里帰りの際などに、多少は洩らすような場合もありましようが、しかしそれにしても、それを聞くのはまづ母親であり、随ってあなた方のような学生の身分にある人は、多くは知らずに過ごしてしまふことでしょう。否、母親に対してさえ、本当のことは、なかなか打ち明けない方が多いといつてよいでしょう。それというのも、結局親に心配をかけたくないからです。

このような次第で、未婚の人々には、結婚生活は結局その華やかな一面しか分らず、その内面の厳肅な一面には、容易に想い到らないのが常であります。それは前にも申すように、未婚の人々がその結婚観を形造るところの主なる材料が、

結局は通俗小説とか映画くらいによる以外に、その途がないからであります。ところが通俗小説の通俗小説たるゆえんは、人生の見方が表面的皮相的であつて、そこには其の深さが無いということですから。いわんや映画においておやであります。それ故たとえれば悲劇を描いても、いたずらに誇張をこれ事として、現実のもつ厳肅さの趣きに乏しいのであります。即ちすべてがお安く出来ており、万事がお手軽に運ばれているのであります。言い換えれば教養の低い人達の安価な同情を引きやすく出来ているところに、その根本的な欠陥があるわけであります。その上さらに注意すべきことは、映画とか小説などというものは、どちらかと申せば、多く異常な出来事を材料とするものでありその上それを拡大鏡でも見るかのようになり、拡大して見せるものであります。そこでそういう異常なものを基準として考えられた結婚観は、現実の結婚の事情とは、大いにその趣の異なるものがある訳であります。でもまだあなた方は大阪というような大都会に住んでいますから、まだしもよいわけですが、ある意味で一番困るのは田舎の小都会に住んでいて、ただ映画や新聞雑誌の通俗小説のみによって、結婚を空想している娘さんが、都

会地へ結婚して来た場合でありましよう。けだしそういう娘さんの空想を充たし得るような男子は、大都会にも、そうざらにあるものではないからです。この辺の事柄は、大都会に育つたあなた方には、多少はお分りであらうと思ひます。

そもそも結婚がいかに厳しいものであるかという事は、たとえば結婚後、婚家先の親しい親戚との交際上の一言一行も、時として重大な結果を招く場合が、ないとはいえないことでも分りましよう。たとえば暮のお歳暮一つ送るにしても、そのわずかの額の相違が、随分主人の気持ちを傷つけることもありましよう。あるいはまた先方から頂いた品に対するうっかりした言が、随分一家の人々の感情を害う場合もないとはいえないでましよう。あるいはさらに直接先方の人をもてなす態度が、時あつては両家の間に深い溝をつくるような場合も無いとは言えないでましよう。このように、婚家先の親戚との交際一つをとつて見てさえ、現実の結婚生活というものが、いかに容易なものでないかということがお分かりでましよう。いわんやこのことは、さらにさらにそれが自分の生家とか、兄弟親戚などに対する交際となつては、よほど遠慮したつもりでもなお足れりとしなないでありますよ

う。

かように現実の結婚生活というものは、いわば身動きも出来ないほどに、四方八方につながる対人関係の真っ唯中へ飛び込むようなものであります。しかもその複雑微妙な対人関係は、結婚するまで全然知らなかったものであります。ですから、人間がよほどしつかりしていないと、結婚後いろいろなへまをしでかす訳であります。しかも一度仕出かしたへまは、生家におけるしくじりとは違って、容易に消え難いのであります。しかるに結婚とは、日曜になれば夫と共に百貨店へでも行くことだの、または一しよに映画でも見に行つて、その帰りに食事でもすることでももあるかに考えているとしたら、その間いかに多くのつまずきや衝突が起こるかは、まったく想像に余りあることでもあります。結婚というものが、如何にむつかしいものかということは、あなた方のうち、兄夫婦が同居していられる処では、多少はその見当がつくことでしよう。一家のうちには、外へは知れないけれど、如何に多くの問題があるものかということも、もうあなた方くらいの年頃になれば、多少は分るはずであります。そこであなた方としては兄嫁さんの立場を深い同情の心をもって推察し、自分も

やがてはあのような立場に立たねばならぬと思つた時、はじめて実際に近い結婚の趣が分るといつてもよいでしょう。しかしそれすらも結局は、世間知らずの娘さんの推察という域を脱し切らない処がありましよう。いわんや小姑（こじゅうと）としての立場から、ただ批評的にあら探しの限で眺めていたのでは、決して真の様子などの分るものではありません。

かような次第で、現実の結婚生活というものは、実に厳しいものであつて、いわゆる通俗小説とか、あるいは映画などから想像するようなものとは断じて違ふのであります。同時にまた現実の結婚生活は、かの女学校の修身式に、ただ相手の人格とか趣味とかいうだけでも、決して真実に触れるものではないでしょう。実さい結婚生活というものを、単にその程度にしか考えないということは、よほどどうかしていると言つてもよいでしょう。つまりその程度の話では、なるほど表面しかつめらしく聞いているとしても、心の底ではどこかくすぐつたいような感じを押え難いでもありましよう。先ほど申すように、現実の結婚生活においては、婚家先の親戚からの贈り物に対するコトバ一つさえ、時としてはずいぶん深刻な感情の相剋をまねく原因ともなるの

であります。かくして現実の結婚は、この人間界のうちでも、もつとも複雑かつ微妙な対人関係といつてよく、しかもそれがこれまで全然知らなかった未知の一人一人の対人関係であつて、それはいわば蜘蛛の巣の張りめぐらされている真唯中へ、いわば素裸で飛び込むようなものであります。かく考えてきますと、結婚生活というものが、人生において如何に重大な意味をもち、また如何に厳しいものかということが、多少はお分りになったかと思つてあります。（黒田香代子記）

バックボンを打ち立てる（微言）

森信三

○今日国民教育の上で、何が一番重大かと問われたとしたら、それは民族としてのバックボンを打ち立てることだと答えるであらう。

○では民族としてのバック・ボーンは、いつたい、どうしたら立つか。答えは明白である。曰く、「対米批判の眼を開らき、内的抵抗の小石をつむことである」

○こう言うと、すぐに親ソ親中共論者でもあるかに誤解される向きもあるかと思われるので、ついでに言うが、今後日

本の進むべき道は、わたくしは態度的には自由を基調とするという意味では、米英6、ソ連中共4べらいの比率がよく、客観的な面では、逆にソ連中共に学ぶべきもの6、米英に学ぶべきもの4くらいと考えている者である。

○ではなぜ、今日、国民教育における最重要事を、民族的バック・ボーン確立にあるというかと言うに、現状のままでは、次の時代を背負う第二の国民が半植民地的住民となりゆき、しかもそれを少しも怪しまなくなる可能性が多分にあるからである。

○今日人びとのうちには「対米批判」というと、それだけでもう親ソ親中共一辺倒的な人間と思う人もあるようである。だが現在のわが国にとつて、この種の人間はど危険な人間はないと言つてもよからう。

○なぜ対米批判をやかましく言うか。それはくりかえしているように、現在われらが圧えられているのがソ連中共であつたら、われわれは対ソ連中共批判を怠つてはならぬわけである。

○永く東海の孤島に住して来たわれわれ日本人は、まことにオメデタイ國民で、アメリカといえ、すぐにシンセツなオジサンやニイサンぐらいに考えやすい。

そうした考え方が、國民全体に、とくに小國民の頭にしみ込んだとしたら民族の将来は、いったいどうなるというのであろうか。

○果然さいきんの新聞紙は、米国の南部諸州において日貨排斥が行われ出したことを報じている。即ち日本の繊維製品を排斥せんがために、それらの品を売る店には、それを明示するような標識を店頭にかかげることにせよというのである。

○しかもそれが州の法律によつて制定せられつつあるというに至つては、われらは世紀の今日、しかも世界における最文明国におけるこれが事実と思えるであらうか。日本國民ももうこの辺で、少し眼をさまさぬといけないと思う。流石の新聞紙も本気になつてとり上げ出した。

○とくに國民教育者が、これらの点に関してハッキリとした「批判の限」をひらく必要があると思う。そして適正なる批判の芽を、小國民にもひけらかす必要があるであらう。

○今日のような激流にも比せらるべき時代にあつては、たんに基礎教科をひと通り忠実に教えるということだけでは、國民教育者の任務としては十分とは言えない。

○もちろん基礎教科の実力養成の重要性

を力説する点では、私は断じて人後に落ちる者ではない。だがたんにそれだけでは済まされない時代だということも知らねばならぬ。全身を貫らぬ一本のたくましい民族としてのバックボーンを打ち立てること……これを忘れては何をどんなに巧みに教えてみても結局は「仏作つて魂入れず」ということになるであらう。

(「実践人」昭和 年5月号第2号)

あとがきに替えて

早いもので「開頭」誌の「微言」が前号で終了して、全号60誌の「微言」の紹介が終了した。とりあえず今号は「開頭」の後継誌「実践人」誌の最初の微言である。

森信三先生が危惧されたバックボーンのない國民が当然現在存在する。それはまさに平和ボケ國民の存在であると思うが如何?

「修身教授録」の紹介も女子教育の重要性に鑑み、天王寺女史師範での講義を再掲をいとわず続けた。来月以降の紙面につき少しく考えたいと思う。

(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422
臂 繁二